

総合的な学習の時間における学年主任の役割意識に関する事例的研究

傳野祥子*・松井千鶴子**
(平成28年8月31日受付；平成28年11月10日受理)

要 旨

本研究は、総合的な学習の時間が充実している小学校に勤務する2名の学年主任を「ミドル」と捉え、その意識を「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を用いて明らかにすることで、総合的な学習の時間において、「ミドル」がどのような役割を果たしているかを考察した事例的研究である。その結果、総合的な学習の時間の充実を目指す学年主任の意識として、【キャリアによる役割意識】、【対等な立場での協働】、【総合の在り方】、【目指す子ども像への接近】、【見えない縛り】の5つのカテゴリーが生成された。また、これらのカテゴリー相互の関係を基に構築した構造図から、対象の学年主任から得られた共通した意識の中核として、「一緒に創る」と「ボトムアップでの教育課程の創造」という2つのコア・カテゴリーが浮かび上がった。これらのコア・カテゴリーが意識の中核に据えられていることで、学年主任は、総合的な学習の時間の充実を目指す際、同時に、同僚を独自の教育実践が生み出せるような自立した人材として育成したり、自学年のカリキュラム創造と実践により学校改善を図ったりするという「ミドル」としての役割も果たしていることが推察された。

KEY WORDS

学年主任 The grade chief, ミドル Middle, 総合的な学習の時間 Periods for Integrated Studies, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach, SCQRM Structure-Construction Qualitative Research Method

1 はじめに

近年、公立学校が抱える教職員年齢構成の変化を背景に、学校組織における「ミドル」への注目が高まっている。文部科学省「学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～(モデルカリキュラム)」(2005)^①においても、中堅教員の役割拡大への期待が一層寄せられていることが捉えられる。

しかし、「ミドル」という言葉については、現実には、ミドルの意味するものが何なのか、厳密に限定されているわけではない。学校組織における「ミドル」の用法について整理した畑中(2013)^②は、論者によって様々な認識で語られているという問題点を指摘しつつも、単純に年数や年齢、職位を担う人物として捉えることもあるが、その他に、機能として「マネジャー」や「リーダー」に連なる形で「ミドルマネジャー」や「ミドルリーダー」の意味で捉えることもあるとし、近年では後者の論考が増加し始めていると述べている。つまり、現在の学校組織における「ミドル」論は、「報告・連絡・相談」といった一面的な役割から、ファシリテーションとそれらを通じた人材育成やアイデアの創造といった、学校を巡る環境変化に対応した役割期待へと変容してきている」とされている。

このような状況の中、現場で「ミドル」と位置付けられる教師は、「ミドル」として、どのように役割を果たしているのだろうか。中でも、児童に直接関係が深い日々の授業において、どのように同僚へのリーダーシップを発揮したり、人材育成を図ったりしているのだろうか。

本研究では、総合的な学習の時間(以下、総合的な学習と略)における「ミドル」の役割に着目する。「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」(2015)^③では、「カリキュラム・マネジメント」や「社会に開かれた教育課程」が重要な事柄として挙げられている。これらとの関係から、他教科や他領域との関連を図りやすいため教育課程の全体像に関与しやすく、且つ、学習内容として現代的諸課題を扱うために社会との接点を築きやすい総合的な学習への期待は今後さらに増し、それに伴って、総合的な学習における「ミドル」への期待も高まってくると考えられる。また、総合的な学習では、各教科等のように、どの学年で何を指導するのかという内容が学習指導要領に明示されておらず、教科書も存在しない。そのため、児童の興味・関心に基づく課題や、地域や学校の特色に応じた

*宮古市立千徳小学校 **学校教育学系

課題等、一つの教科等の枠に収まらない課題に取り組む学習活動を行える一方で、学習内容の設定や質の維持、到達目標、評価等に困惑、混乱、不安が伴うことにもなる。教員の裁量が大きく、担任の力量や姿勢で学習の質に明瞭な差が生まれるため、特に、経験の浅い教員にとっては困難を感じる学習活動になるであろう。そして、近年の公立学校が抱える大量退職、大量採用の問題を背景に、そのような難しさを感じる教員がますます増えることが予想されることから、総合的な学習における「ミドル」の役割は、一層重要性を増すことが考えられる。

では、総合的な学習において「ミドル」とは、誰に該当するのであろうか。本研究では、前述した畑中の「ミドル」の用法の整理を基に、職位を担う人物であり、且つ、アイデアを創造し学習を推進・充実させる役割を果たしつつ、若手の人材育成を図るという役割も果たし得る存在として、学年主任を「ミドル」と捉えることとする。総合的な学習における学年主任の役割は、学習指導要領解説総合的な学習の時間編(2008)⁽⁴⁾において、総合的な学習の実践を支える校内分担例として、「学年内の連絡・調整、研修、相談」が挙げられている。しかし、この役割だけでは、総合的な学習の充実を図ることは難しいと考える。実際に充実した学習を展開していくために、学年主任は、先に挙げた役割だけではなく、より多くの役割を果たしているであろう。そのため、現実の学年主任の役割意識の内実を探ることは、総合的な学習における「ミドル」の役割を、より明確にすることにつながると思われる。

2 目的

以上の問題意識から、本研究では、総合的な学習の充実を目指す時に、それを推進していく立場である学年主任を「ミドル」と捉え、その意識モデルを構築することを目的とする。また、それを通じて、総合的な学習において、「ミドル」が、どのような役割を果たしているかを整理し、今後求められる役割について考察する。

3 研究の方法

3.1 2名のインタビュー対象者について

総合的な学習に関する意識調査は、多標本に基づく数量的調査がほとんどであった^(註1)。これは、教員であれば、年齢や経験に依らず、誰をも対象としている。しかし、本研究では、総合的な学習を充実させるための意識を明らかにする際、従来の研究やアンケートのように多標本を対象とした広く浅くというスタイルではなく、少数の事例を対象として深くその体験を聞き出し、その意識の内実を構造化することを目的とした。加えて、総合的な学習の充実が果たされている学年主任の意識を成功例として構造化することで、今後、総合的な学習における「ミドル」の役割を模索する人にとっても有益な知見を生み出すことができると考えた。

以上のことから、本研究では研究関心に照らして、総合的な学習を中核とした教育課程を編成・実施しているA小学校^(註2)を「総合的な学習が充実している学校」と捉え、その中で複数年以上学年主任の経験があり、かつ経験年数が浅い教諭と学年を組んでいる学年主任B教諭(男性)、C教諭(女性)の2名を、「ミドル」として関心相関的に抽出した。

調査当時、B教諭、C教諭の二人とも40代前半であり、A小学校での学年主任歴も、ともに2年目であった。また、B教諭は30代前半の女性、C教諭は20代初任者の男性と学年を組み、総合的な学習の実践を進めていた。なお、調査当時A小学校は学年2学級であり、総合的な学習は学年総合で実施されているため、学年が同一のテーマ、年間指導計画で行われていた。

3.2 調査方法

対象者には、研究内容を説明し、承諾を得た上で、2015年8月に半構造化インタビューを実施した。時間は各1時間程度で、内容は「総合的な学習を充実させるために心がけていること」を主軸とし、それを深めていけるように、「どのように単元構想を行ったか」や「学習活動の展開の方法」、「学年主任として意識していること」などである。また、対象者の了解を得て、インタビュー内容はICレコーダーに録音した。

3.3 分析枠組み

本研究では意識モデルの構築を目的としているため、その目的に照らし、インタビューをもとにボトムアップ的にモデルを構築するのに適した、木下(2007)⁽⁵⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA

とする)を分析の枠組みとして採用した。

ただし、M-GTAでは、具体例(ヴァリエーション)が少ない概念は採用しないとされており、本研究のような少数事例に基づく研究に適していない側面があるため、研究関心に応じて適宜修正しながら進める枠組みが必要となる。本研究では、そうした機能をもつSCQRM(西條2007⁽⁶⁾、西條2008⁽⁷⁾)をメタ研究方法として採用することで、M-GTAのエッセンスを生かしつつ、少数事例に基づく研究を進めた。

3.4 分析の手続き

収集したインタビュー内容を、先述したM-GTAの手法で、分析ワークシート(表1)を用いて整理し、構造化を試みた。分析手順は、以下の通りである。

- ① インタビューデータからプロトコルを起こし、テキストを作成する。
- ② テキストからキーワードとキーセンテンスの選定を行い、それに名前を付ける。
- ③ パラグラフに分け、小見出しを付けることにより構造化する。
- ④ 分析ワークシートを作成し、概念を生成する。(③と④は並行して行う)
- ⑤ 暫定的な全体像やモデルを素描する。

なお、分析ワークシートは、概念名、定義、具体例、分析の視点を書き留める理論的メモからなるもので、1概念につき1ワークシートの形式で作成した。以下に、概念名「相手への配慮」の分析ワークシート例を挙げる。

表1 分析ワークシート

概念名	相手への配慮
定義	相手の気持ちに配慮することで、自分の話したい内容や、やりたいことが限定されること
ヴァリエーション B教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・本当は自分でやればいいんだけど。 ・まあ、難しさはありますよね。彼女が活躍できるように立ち回ったり振る舞ったりしなくちゃいけない瞬間がありますからね、彼女も完璧じゃないから。 ・よっぽどだったら言うけど(そうでなければ言わない)。
ヴァリエーション C教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ(相手は)よく分かっていないから(中略)、だんだんそれがあまり意味の無いことになっていくんだろうなって思ってる。(中略)でも、初任者だし、今からぶち壊すのはかわいそうだから、徐々にねっていうことで考えています。 ・本当に違う時…でも違うことはしないけど、でも、最低限は言うけど。
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ① 配慮か遠慮かの検討 ② カテゴリー【キャリアによる役割意識】との矛盾 ③ 学習の充実に向け、この概念は障害になるのではないか。だとすれば、どのように乗り越えていけばよいのか。

4 結果

分析の結果、16個の概念と5個のカテゴリーが生成された。以下では、分析結果をカテゴリーごとに説明する。なお、< >は概念、【 】はカテゴリーである。

4.1 【キャリアによる役割意識】

総合的な学習の充実を目指す時の学年主任の意識は、【キャリアによる役割意識】に支えられている。

B教諭の「もう40過ぎだし、何ていうか自分みたいに考えてくれる人が育つといいなって思ったんです。だから、構想段階、メインフレームは俺が考える。ただし、やるのは(経験の浅い)彼女なんです。」や、C教諭の「(初任者なので)見てる(見てもらってる)。とにかく覚えてもらわなくちゃいけないから。(話し合いを)拡散させたい時は、やってもらうかな。」からは、対象教諭が、相手や自分の経験や力量を考え、適切に役割を分担する<キャリアを意識した役割分担>を意識していることが分かる。加えて、B教諭の「(自分の考えが相手の考えと違う時は)いや、言います。今日の授業である発言を取り上げなかったけど、取り上げた方がよかったとか。」や、C教諭の「全てオープンにしてるつもり。自分のやっていることや考えは全部言うし。」のように、授業が充実するために、伝えるべきことはしっかりと伝えるという<積極的な情報提供>を行っていることも理解される。また、C教諭は「毎

日、(打ち合わせは)朝するようにしているけど、そんなに時間はかけてじゃなくて」とも語っており、自分が発信するだけでなく、朝や授業後、放課後等に相手と情報交換をする機会を意図的につくるという〈日常的な情報交換〉を心がけていることも捉えられた。

これらの取組は、活動全体の枠組みやそれに向けての手だてを示したり、共通理解を図ったりすることになり、授業の充実につながっていくと考える。

4.2 【対等な立場での協働】

【キャリアによる役割意識】からくる〈キャリアを意識した役割分担〉、〈積極的な情報提供〉、〈日常的な情報交換〉の取り組みを背景に、授業実践の充実に向けて動き出していくことになるが、ここでの学年主任の意識はキャリアにこだわらない【対等な立場での協働】であることが語られた。

その一つは、B教諭の「彼女は自分でもやりたいことをもっているのだから(中略)、やってみればいいんじゃないって(言う)」といった、相手の〈主体性の尊重〉である。加えて、「ゴールは決まっています、二人でそれに向かっていて、俺はこう行けばいいと思っているけど、彼女はああ行けばいいと思っているわけじゃないですか。(中略)あっち行ったらこっち行ったら、ゴールに行きつけばいいだけですから。」というように、中長期目標であるゴールを共有した後は、指導内容や指導方法は相手に任せる〈指導の尊重〉も見られる。また、C教諭の「自分のスタイルって、きっとあるだろうから」という語りからは、相手の〈個性の尊重〉を重視していることが理解される。

そして、先程の意識の理由として、B教諭は「お任せ。(中略)めちゃめちゃ信頼してますよ。支えてくれるんですよ、俺のこと。本当に支えてくれるって感じ。だって、こんな好きなこと言ってる学年主任のことをちゃんと信頼して授業してくれるし、子どもたちと接してくれるし、一緒に動いてくれるんだから、本当にできた人です。」という〈相手への信頼〉、C教諭は「一緒に創っていく仲間だから、初任だから下とかは考えてなくて、大事な隣の人だからね。やっぱり一緒に創っていくんだから、一人じゃできないし、(中略)同じ土俵に立って、一緒に学んでいく仲間、メンバーだから。」という〈仲間意識〉を語っている。併せて、C教諭からは、「気付いてもらうまで待つって感じ。子どももそうだけど、言われて学ぶより気付いて学んだ方が、すごく心に入っていきと思うから。(中略)自分もそういう風に育ててもらったって部分はあるかもね。あまりにも「〇〇先生、こうしてください」とか言われると、子どももそうっちゃう気がするし。」というように、学年主任として伝えるべきことは伝えるが、自分の過去の経験から、直接的に指導されるよりも、自ら考えたり気付いたりして学んだ方が力量形成につながると考えているため、〈気付くのを待つ〉ことを意識していることも語られている。

以上のことから、学年主任は、実践段階においては、〈主体性の尊重〉、〈指導の尊重〉、〈個性の尊重〉、〈相手への信頼〉、〈仲間意識〉、〈気付くのを待つ〉という意識を重視することによって、キャリアにかかわらない【対等な立場での協働】を成り立たせようとしているのである。

4.3 【見えない縛り】

【対等な立場での協働】を成り立たせようとする一方で、B教諭は「本当は自分でやればいいんだけど。(中略)まあ、難しさはありますよね。彼女が活躍できるように立ち回ったり振る舞ったりしなくちゃいけない瞬間がありますからね。(中略)よっぽどだったら言うけど(そうでなければ言わない)」、C教諭は「まだ(相手は)よく分かっていないから(中略)、だんだんそれがあまり意味の無いことになっていくんだろうなって思ってる。(中略)でも、初任者だし、今からぶち壊すのはかわいそうだから、徐々にねっていうことで考えています。」という、〈相手への配慮〉を語っている。このことから、【対等な立場での協働】を意識し、相手を尊重するがゆえに、自分のやりたいことや言いたいことが制限されるという【見えない縛り】も感じていることが伺える。

4.4 【総合の在り方】

総合的な学習の充実、学年主任の考える【総合の在り方】に大きく影響される。対象教諭からは、〈新しい価値の創造を意識した単元開発〉、〈総合の特性を生かしたカリキュラム・マネジメント〉、〈子どもの実態に即した単元構想〉、〈子どもが創る〉ということを大切にしていることが示された。

B教諭は、単元の構想について、「今後の学校って、知識を伝達する場ではもたないじゃないですか。学校ってどうあるんだろうって、そこから(単元の構想を)考えたというか。」「民と官と、そういうことを上手く子どもたちが橋渡ししてくれる場所に学校がならないかと思って。そういうモデルにならないかと思って。」と語っている。学校を知識伝達の場だけでなく社会をつなぐ場という価値も付加できると捉え、総合的な学習を通してそれを実現することで、学校の新しい価値を社会に創造していくという〈新しい価値の創造を意識した単元開発〉を意識している

ことが特徴的である。

また、C教諭の「2学期は基礎社（社会科）と連携して、市内地図。」、「結局、どの活動も総合と絡めていくので（後略）。」等の語りからは、他教科や領域と関連を図りやすいという＜総合の特性を生かしたカリキュラム・マネジメント＞を意図的に行っていることが分かる。加えて、「3年生は（自己決定が苦手なので）色々興味あるものにどんどん行ってみようって。行って興味・関心のあるものにアクセスしていくっていう関心・意欲を高めていこうって。」というように、前年度の踏襲ではなく＜子どもの実態に即した単元構想＞を行っていることも示されている。

また、両者ともに「まずは、子ども主体で組んでいく」、「やりたいことは子ども主体。これは必ずある。」、「（教師が考える）方向はあるんだけど、手段は（子ども自身が）自分たちで創っていく感じ。」等、子ども主体で学習を展開していくことが語られており、学習は＜子どもが創る＞という指導観をもっていることも分かる。

これらの【総合の在り方】を重視することが、【目指す子ども像への接近】のカテゴリーに大きく影響してくる。

4.5 【目指す子ども像への接近】

2名の学年主任からは、前述した【総合の在り方】を意識し、＜子どもの事実からのカリキュラム編成＞や＜全教育課程での子どもの育成＞を実践していくことが、全教育課程の関連性と連続性の中で子どもを育てることにつながり、結果として【目指す子ども像への接近】への実現が図られていくことが語られた。

C教諭は、「総合で生まれた思いや願いを軸にして、他領域と繋ぎあわせたり絡めていくとかを考えながら、年間の子どもの学びをコーディネートしていくことは考えているかな。（中略）一応の計画は立てるんだけど、子どもの話し合いや意図で、カリキュラムはガラガラ変わっていく感じで。」と語っている。ここから、子どもの事実からカリキュラムを随時修正したり更新したりしながら学習活動を進めることで、＜子どもの事実からのカリキュラム編成＞を実現しようとしていることが分かる。さらに、「領域を上手くコーディネートしながら、子どもと一緒に年間を通して（研究主題である）自立と共生っていう大きなテーマに向かって、（中略）カリキュラムを創っていくことは常に考えてる感じ。」とも語っており、日々、子どもの事実からカリキュラムを修正したり更新したりしながら、年間を通して＜全教育課程で子どもを育成＞できるよう実践していくことが、【目指す子ども像への接近】のための手だてになると考えていることが分かる。

B教諭は、「総合で大事にしていることがあるので、いろんな人と手をつないで新しい価値のものを創るっていうことが、やっぱり総合では可能なので。（中略）ただ、それは総合に特化しているようだけど、算数だってみんなと考えを出し合えば新しい価値を創るっていうことができるっていうのは、算数だってやっていることなので。（中略）うちの教育課程全体が子どもを良くしているっていうか。総合だけじゃないんですよね、総合だけじゃない、本当に全ての領域の活動が子どもたちを良くしているの。」と語っている。B教諭が総合的な学習で大切にしている「色々な人と手をつないで新しい価値を創り出す」ということを、総合的な学習の授業時間に限らず、全教育課程で意識し、日々、実践を重ねたり単元を開発したりしていくことが、【目指す子ども像への接近】につながっていくと感じていることが示されている。

4.6 小括

ここまで示したように、総合的な学習の充実を目指す際の学年主任の意識は、【キャリアによる役割意識】からくる取組を背景に、実践上では相手との【対等な立場での協働】を成り立たせようとしている。しかし、対等や協働を意識するあまり、相手への配慮から【見えない縛り】を感じることも語られている。加えて、【総合の在り方】として、他教科や他領域と関連を図りやすいという特性を生かし、日々の授業を実践したり、随時更新したりしながらカリキュラム・マネジメントをしていくことが、子どもの事実からのカリキュラム編成や、全教育課程の関連性と連続性の中で子どもを育てることに繋がり、結果として【目指す子ども像への接近】につながると考えていることが明らかになった。

以上の結果から、ボトムアップ的に構築したものが、次の図1のモデル（構造図）である。

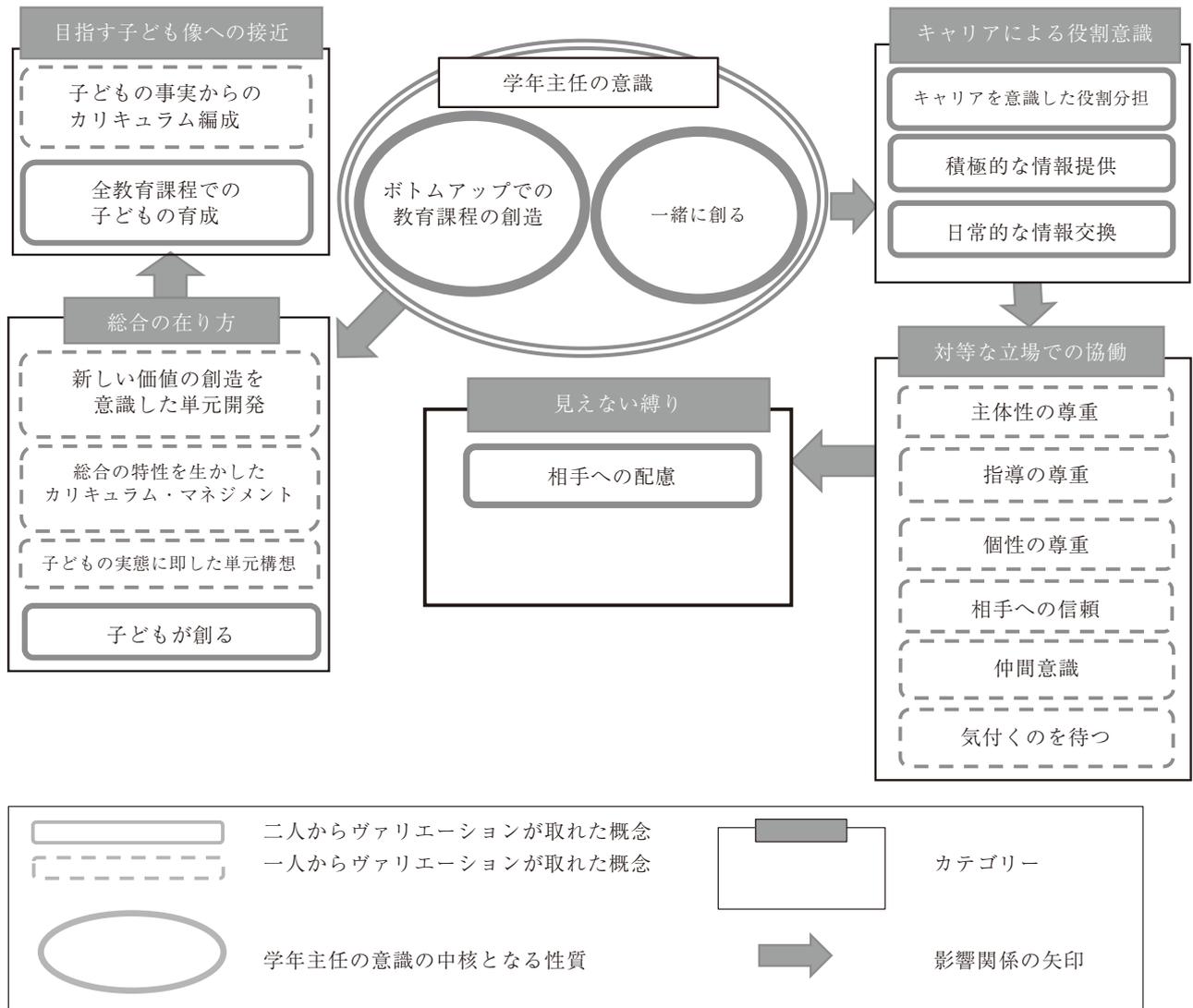


図1 総合的な学習を充実させるための学年主任の意識

また、これらの語りから、総合的な学習を充実させるための学年主任の意識の中核には、「一緒に創る」と「ボトムアップでの教育課程の創造」という2つの性質が、コア・カテゴリーとしてあるのではないかと推察された。

5 考察

2名の学年主任の語りは、個性的であり様々であったが、その根底にある共通した特徴を見出すことができた。そのため、今回得られた共通した意識こそが、総合的な学習の充実を目指す上での学年主任の在り方、つまりは「ミドル」の果たすべき役割に一定の示唆を与えるものだと考える。そこで、コア・カテゴリーとして浮かび上がった「一緒に創る」と「ボトムアップでの教育課程の創造」の2つの点から、研究目的「総合的な学習において、「ミドル」がどのような役割を果たしていくことが求められるのか」について、以下に考察する。

5.1 一緒に創る

2名の学年主任は、その役割意識から、総合的な学習の充実のために情報提供や情報交換を意識的にを行い、共通認識・共通理解という限定により学習の枠組みを整えた後は、相手を信頼し、指導を任せるということに価値を置いていた。これは、第一義的な目的として、学習のフレームをある程度整えることで学習の質の保障を担保することにつ

ながるが、他方で、相手の主体性を伸ばし、独自の教育実践を生み出せるような自立した人材を育成することにつながると考えられる。一方で、両教諭とも「一人じゃできない」「支えられている」というように、一人で学習を創造することの限界や、協働することで学習がより良いものになるという実感もあり、役割意識だけに囚われず、同僚を対等で相補的な存在として捉えていることも示されている。このことは、立場や年齢、経験を超えた協働の実現を生み、その相乗作用により、よいアイデアが生まれ、総合的な学習が充実することにもつながると考えられる。

併せて、学年主任がこのような意識の下、年間を通して実践を行っていくことは、必然的に教師間のコミュニケーションを増やすことになり、インフォーマルな形式での情報のやり取りの促進につながると考えられる。特に、総合的な学習は、対象教諭の語りにもあったように、教師の構想と児童の問題意識の方向性にずれが生じた場合、単元の途中であっても計画に変更や修正を加えることが望まれる。そのため、学習の展開の仕方によって、その都度、学年の教師間で授業や子どもの姿を協議しながら、次の活動を構想しなければならない。このことは、前述した協働による学習の充実につながるだけでなく、若い教員にとって学年主任が個人的にもつ実践知や暗黙知に触れる機会の継続的保障となり、力量形成に大きな影響を与えたと考えられる。また、お互いにアイデアを出し合い、一緒に悩んだり考えたりしながら学習を創っていくことは、若い教員に限らず、学年間がどのような年齢構成であっても、お互いの力量を高め合うことにつながると推察される。

以上のことから、学年主任が、一緒に創るという意識に価値を置くことは、総合的な学習の充実と同僚の人材育成を同時に推し進めていくことにつながると考えられる。

5. 2 ボトムアップで教育課程を創造する

2名の学年主任の意識は、既存の教育課程の実現ではなく、子どもの事実を基に全教育課程を関連させ充実した実践を重ねることで、自らが自学年の教育課程を創造することになり、それが結果として学校の教育課程の改善につながるというものであった。つまり、学年主任は、総合的な学習を中核に他教科や領域を関連させながら自学年のカリキュラムの創造と実践を行っていくことで、結果として、学校改善につながるアイデアを創造する役割と、それを実現していく実働の主体であるという、2つの役割を担っていると推察される。これは、ミドル・スクールリーダーに期待される基本姿勢として文部科学省(2005)⁶⁾が示した「学校における中堅教員(ミドルリーダー)に期待される行動(例示)」にある「学校ビジョン構築への参画と教育活動の推進」の役割を、総合的な学習の授業を通して、子どもの姿から実現していることに当たると考えられる。対象教諭の語りにあるような総合的な学習の指導観を意識し学習活動を展開するためには、教育活動全体を見通してのカリキュラム・マネジメントが不可欠となるため、必然的にアイデアの創造による学校ビジョン構築への参画が図られるであろう。加えて、それらを実践し、子どもの姿で実現していくことは、教育活動の推進にもつながると考えられる。以上のことから、ボトムアップでの教育課程の創造という意識は、総合的な学習の充実だけでなく、「ミドル」の役割期待の実現にも大きく重なることが推察される。

また、このような学年主任の姿を身近に感じることは、若い教員にとって、自分自身も授業改善や学校改善に向けて積極的にアイデアを生み出していくというロールモデルになる。加えて、協働での実践のため、自分達の実践が学校改善に結び付くという実感の獲得にもつながることから、前述した「学校における中堅教員(ミドルリーダー)に期待される行動(例示)」の中の「同僚教職員の指導・育成」に当たる、人材育成の面でも重要な視点であることが考えられる。

6 今後の課題

本研究では、学年主任へのインタビューから、総合的な学習の充実を目指す時の学年主任の意識モデルを構築することにより、その内実について整理した。また、意識の中核を成すコア・カテゴリーから、総合的な学習における「ミドル」の役割についても考察した。しかし、本研究では次の点を課題として残している。

第1に、今回の研究は、対象を総合的な学習を中核とした教育課程を編成・実施している小学校の複数年以上学年主任の経験がある学年主任に限定したものであった。これは、対象とした学年主任が、総合的な学習についての実践や知識が豊かであり、ある程度経験に裏付けされた自信がある教員であるということでもある。そのため、学年主任であっても、総合的な学習の指導に苦手意識をもっている、もしくは実践経験が少ない学年主任を対象とした場合、全く違うモデルが構築されることは容易に想像することができる。それらを考慮した上で、本モデルが実践場面での程度適用可能か見極める必要がある。

第2に、人材育成という視点で見た際には、対象としたA小学校が学年2学級という学年の連携を密にしやすい環境であり、且つ、学級総合ではなく学年総合であった点が大きく影響していたと考えられる。学年総合ではなく学級総合を行っている学校や、規模が大きく学年の学級数が多い学校等を対象とした調査も必要である。

第3に、学年成員の年齢構成についてである。今回は、研究関心に照らして、学年を組んでいる相手よりもキャリアが明確に長い学年主任を対象とした。しかし、学年成員のキャリアや年齢にあまり差がない場合には、「ミドル」の捉え方や役割も異なってくることが予想される。

以上のように、より多面的なデータを収集し分析を追加していくことで、さらに実践場面に適用できる構造図の作成や、総合的な学習における「ミドル」の役割をより明らかにすることにつながると思われる。

注釈

- 1) 例えば、ベネッセ教育総合研究所が行った「学習指導基本調査報告」(2010)や、小林稔らの「総合的な学習の時間」に関する教員の意識調査」(2003)、「総合的な学習の時間」に関する教員の意識とその変化」(2004)などがある。
- 2) 対象としたA小学校は、平成24年度より文部科学大臣指定研究開発学校の指定を受け、教育課程の開発研究に取り組んでいる。6つの資質・能力の発揮を重視するという観点から学習対象、学習内容等を整理し、教育課程を、「生活・総合」、「数理」、「ことば」、「創造・表現」、「健康」、「ふれあい」の6つの領域と「学びの時間」に再編し、教育活動を実施している。そのため、領域名は異なるが、領域の目標や重点を鑑みた際、「生活・総合」領域が総合的な学習の時間に該当すると考え、本稿ではA小学校の「生活・総合」領域を総合的な学習の時間と捉え、論を進めることとする。

引用・参考文献等

- (1) 文部科学省マネジメント研修カリキュラム等開発会議：「学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～（モデルカリキュラム）」、2005。
- (2) 畑中大路：「学校経営におけるミドル論の変遷－「期待される役割」に着目して－」九州大学大学院教育学コース院生論文集第13号、pp.87-101、2013。
- (3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会：「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」、2015。
- (4) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」、2008。
- (5) 木下康仁：「ライブ講義M-GTA ー実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」、弘文堂、2007。
- (6) 西條剛央：「ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMベーシック編－研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで－」、新曜社、2007。
- (7) 西條剛央：「ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMアドバンス編－研究発表から論文執筆、評価、新次元の研究法まで－」、新曜社、2008。
- (8) 上掲書：(1)、pp.30-31
- (9) 新潟県上越市立大手町小学校：「大手町カリキュラム2015 真の<自立>と<共生>を目指す教育課程の創造」、2016。

A Case Study on the Role Awareness of the Grade Chief in Periods for Integrated Studies

Sachiko DENNO* · Chizuko MATSUI**

ABSTRACT

This is a case study on what roles “the middle” needs to pursue in periods for integrated studies by defining two grade chiefs working at an elementary school with well-developed periods for integrated studies as “the middle,” and by examining their awareness by way of the “modified grounded theory approach.” The case study has identified five categories in the awareness of the grade chief, who aimed to enrich the periods for integrated studies: career-based role awareness; collaboration as equals; what comprehensive means; approaching the ideal children; and invisible constraints. The structural diagram constructed from the inter-relationships among these categories has identified two core categories: “creating together” and “bottom-up creation of educational processes,” as shared in the core of the teachers’ awareness. It was inferred that the grade chief plays the role of “the middle” in developing and enriching the periods for integrated studies to help colleagues develop into autonomous teachers capable of producing their own teaching practices and to contributing to the improvement of the whole school by creating and putting into practices curriculum of the year they are in charge of by having these core categories at the core of their awareness.

* Sentoku Elementary School ** School Education